高知県立坂本龍馬記念館だより 2016(平成28)年10月 第99号

高知県立坂本龍馬記念館 The Sakamoto Ryoma Memorial Museum

飛騰

ひとう

海援隊旗(二曳きの旗)

http://www.ryoma-kinenkan.jp

万里 BANRI IKKUU 一空

「再検証・薩長同盟」展

平成28年11月5日(土)～29年1月6日(金)

今年、平成28年(2016)は、龍馬や慎太郎らの尽力によって薩長同盟が成立した慶応2年(1866)から150年目にあたる節目の年である。龍馬の功績のひとつに数えられる薩長同盟であるが、薩長同盟とはいったい何か。来年は暗殺150年、また龍馬記念館もリニューアルのための休館に入り、大きな転機を迎えるなか、この課題に展示を通して取り組む。

高知初公開

〈写真1〉慶応元年閏5月5日付渋谷彦助宛龍馬書簡(鹿児島県歴史資料センター黎明館蔵 玉里島津家資料)。展示期間は11月5日(土)～12月4日(日)。

「薩長同盟」の複雑さ

薩摩と長州は、いうまでもなく討幕勢力の二大巨頭である。その二藩をつないだ「薩長同盟」は、従来幕末政治史の大きな画期ととらえられてきた。そのため研究史も厚く、多くの研究者が薩長同盟に言及し、現在にいたるまで長く議論が続けられている。そもそも「同盟」を指す用語が複数存在することが、この問題の複雑さを示している。龍馬記念館では伝統的に「同盟」を用いているが、研究者の間では現在「盟約」が一般的で、少しさかのぼれば「連合」「提携」「融和」「和解」「密約」など、さまざまな形容が存在する。

最大の争点

同盟をめぐる議論で最大の争点となるのは、慶応2年1月段階の薩長の提携が、画期的な軍事同盟であるか否か、という点である。戦前の薩長史観のもとでは、これが討幕を見すえた軍事同盟であるという見方が大半を占めたが、1980年代に青山忠正氏がこれを否定して以来、現在では画期的な軍事同盟とまでは評価しない、という見方が大勢を占めている。この間、多くの新しい史料が掘り起こされ、慶応3年の複雑な政治過程についての研究が進み、またあまりにも薩長に偏った見方が軌道修正されてきた結果でもある。

同盟に携わった龍馬についても、過去、慶応2年1月の京都会談に出席していなかった、あるいは薩摩の手先として薩長同盟のために働いていた(エージェント説)など、その活動をめぐる疑問が数々呈示されてきた。今回目玉資料として展示する、慶応元年閏5月5日付渋谷彦助宛の龍馬書簡(写真1)は、かつてその「エージェント説」の根拠とされた資料である。渋谷は太宰府で五卿の警護にあたる薩摩藩士で、龍馬は土方楠左衛門(久元)から得た将軍進発の情報などを渋谷に書き送っている。エージェント説については、宮地佐一郎氏らが既に否定している通りであるが、今回はるばる鹿児島からやってくる龍馬書簡という意味ではとても貴重で、是非注目していただきたい。

新資料 桂小五郎書簡

もう1つの目玉資料は、昨年購入した桂小五郎書簡(写真2)で、一部を除き既刊の史料集等に掲載されていない新資料である。慶応元年閏5月、下関で予定された薩長会談のため、下関で西郷を待つ間に書かれたものである。結局西郷は下関に立ち寄らず、会談は不調となるが、当時の桂の心境が読み取れる貴重な資料である。

以上について、より詳しい解説は、中岡慎太郎館との共通図録『薩長同盟・幕長戦争』にも記した。展示と併せてご覧いただければ幸いである。

亀尾 美香

動画配信中

〈写真2〉慶応元年閏5月17日付広沢藤右衛門・前原彦太郎宛桂小五郎書簡・部分(当館蔵)

飛騰の紙面にスマホをかざして動画を見よう！ 視聴方法は簡単！

① 右のQRコードから無料アプリ「COCOAR2」をダウンロード

② アプリを起動し ▶ マークのついた写真にスマホをかざす

※端末の環境により、イメージが認識されるまでに時間がかかる場合や、正常に動作しない場合があります。

※本コンテンツは2016年12月31日まで閲覧可能です。

―慶応2年から150年―

中岡慎太郎館との共催行事

今年は薩長同盟から150年であると同時に、幕府と長州が戦い、事実上長州が勝利した幕長戦争からも150年にあたる。北川村立中岡慎太郎館では、同時期に「幕長戦争－徳川幕府崩壊の引き金－」展（11月9日（水）～12月5日（月））を開催するが、薩長同盟に龍馬と慎太郎が協力したように、龍馬記念館と慎太郎館では共同企画を開催することとなった。主な催しは次の通り。

①共通図録
『薩長同盟・幕長戦争』発行（フルカラー100頁、11月刊行予定）

②講演会
「薩長盟約の実態－英雄史観からの脱却－」（高知市立自由民権記念館・高知近代史研究会共催）
11月26日（土）15時から
高知市立自由民権記念館 民権ホール
講師：家近良樹氏
（大阪経済大学教授）
申込不要　聴講無料

③学芸員と行く展示見学バスツアー
1回目：11月20日（日）
2回目：12月3日（土）
各回とも9時30分～17時で同じコース
（高知駅～龍馬記念館～桂浜荘（昼食）～慎太郎館～高知駅（解散））
参加費：2,000円
（高校生以下1,500円）
申し込みは、とさでんトラベル（℡088-882-0111）まで。

『桂浜・浦戸　碑めぐり』❷

碑に刻まれた高い志と並々ならぬ覚悟

『浦戸城址碑』

かつて長宗我部氏最後の居城「浦戸城」が存在した浦戸城山。「龍馬記念館前」バス停の前の三叉路を桂浜へ向って少し下ると、車道左脇の石垣の上に広場があり、その奥の、縦長のシンプルな石碑が目に入る。案内板には「浦戸城址碑」とあり、浦戸城と長宗我部氏らの歴史や廃城までの経緯が簡潔に記載されている。広い台座を含め3メートル程の高さの石碑に近づいてみると、「浦戸城址」の横書き文字の下に、縦書きで漢文がびっしりと刻まれ、最初の行に「東郷平八郎」、最後に「『川田鐵彌』撰」の名が見られる。文面は黒く変色し判読しづらい。裏側には「大正八年七月建之　高千穂学校」とある。

広谷喜十郎氏の「高知市歴史散歩」によると、石碑の撰文は、高知出身の川田鐵彌（てつや）が明治28（1895）年22歳の頃浦戸を訪れた時に詠んだ漢詩で、題字は東郷平八郎。漢詩の、高千穂大学教授・渋谷栄一氏の通訳には「川田鐵彌が第五高等学校（現熊本大学）在学中の夏休みに郷里土佐に帰郷した折、浦戸城跡を船中より望み、（中略）土佐の歴史、殊に旧城主長宗我部元親の商業の振興に尽くして途半ばにして已やんだ悲憤に想いを致し、自ら教育を重んじ英才を育成しなければそれを晴らすことはできないと、将来教育者となり学校を建設すべき決意を述べている。」とあるとのこと。

この地を治めた先人に思いを馳せ詠まれた漢詩に、22歳の若さでありながらすでに高い志と並々ならぬ覚悟が込められていたことに深い感銘を受ける。百年近く前この浦戸城址碑を建立した高千穂学校は、川田鐵彌が志を果たし教育者となって創設した学園であり、現在も高千穂大学として学びの精神が受け継がれている。

また、彼がこの城山一帯の歴史、地理、自然に多くを学ぶべきと考え「桂浜学園」と記していたことも知った。自然が育み先人が刻んだこの地の歴史に、心揺さぶられ志を抱いたその思いを胸に留め見渡すと、これまでとは違う景色に見えてくる。

手島ゆか・佐々木恵

飛騰の紙面にスマホをかざして動画を見よう！　視聴方法は簡単！

① 右のQRコードから無料アプリ「COCOAR2」をダウンロード
② アプリを起動し ▶ マークのついた写真にスマホをかざす

※端末の環境により、イメージが認識されるまでに時間がかかる場合や、正常に動作しない場合があります。
※本コンテンツは2016年12月31日まで閲覧可能です。

2017年県外巡回展
「土佐から来たぜよ!『坂本龍馬』展」

担当者リレーエッセー❸
東京・目黒雅叙園

目黒雅叙園マーケティング部
グループマネージャー
川中　博史

江戸の目黒に龍馬が来るぜよ！

ソフトバンクグループ孫社長が主催者

「土佐からきたぜよ！『坂本龍馬』展」の東京開催は、ソフトバンクグループ㈱と高知県立坂本龍馬記念館の共催で開催されます。会場は目黒雅叙園内にある東京都指定有形文化財「百段階段」です。

坂本龍馬記念館と当社は、2010年12月「坂本龍馬×百段階段」展開催でご協力をいただいて以来のおつきあいで、「龍馬展」としては2回目の開催となります。

今回のお話をいただいた時、ソフトバンクさんとの共催とはなぜだろう、なぜ当社なのだろうと疑問がわきました。よくよくお話を伺うと、ソフトバンクグループの孫正義社長は坂本龍馬の大ファンで、ご自身も龍馬関係の資料を所蔵されておられる。また、坂本龍馬記念館の森 前館長とは龍馬を通じた盟友のような、ご懇意の間柄だったということです。お忙しい孫社長が今回の開催を決めたのは「森館長との約束だったから」だともお聞きしました。森前館長から「展覧会は目黒雅叙園でいこう」と提案があったことも、当社で開催される契機になったようです。

「百段階段」の一室「漁樵の間」

チャップリンも来た目黒雅叙園

さて、「飛騰97号」では作家小松成美さんのインタビュー会場として紹介していただきましたが、目黒雅叙園と言ってもご存じない方も多いと思います。

目黒雅叙園は昭和3(1928)年創業、昭和6年、東京の西郊、目黒の地に日本料理と中国料理を提供する料亭として開業しました。昭和初期の日本画家の作品や螺鈿細工、美術工芸品で園内を埋め尽くした豪華絢爛な内装で「昭和の龍宮城」と呼ばれていました。当時の宣伝物には、「我らが誇る三大名所 富士ヤマ、日光、目黒雅叙園」とあり、昭和7年には世界的な喜劇役者チャップリンも来園しています。

昭和10年ごろには日本で初めて総合結婚式場というシステムを考案し、昭和14年には1日116組の挙式を執り行ったという記録が残っています。幸運なことに、一部を除きほとんどの建物が戦火を免れ、戦後は結婚式場として営業を続けました。

昭和62(1987)年、隣接する目黒川の改修工事に伴い、建物の一部を除き、全面的に建て直すことを余儀なくされました。この時、現在の「目黒雅叙園」が誕生しました。また、残された建物というものが東京都指定有形文化財「百段階段」です。ここが今回の会場で、百段階段からつながる7つの部屋で開催いたします。

目黒雅叙園全景

「百段階段」での展覧会は2000年頃から始まり、全国の雛人形を集めた「雛まつり展」、国内生け花の流派が集う「いけばな展」の他、青森の「ねぶた」や秋田の竿燈を飾る「和のあかり展」など年間5企画ほどを開催しています。

一風変わった展示にご期待を

残念ながら、私自身は森 前館長の警咳に触れることはできませんでしたが、さまざまなお話を聞く中で森 前館長の人間力を知り、また、孫社長の龍馬への熱い思いに感服しております。そして、それらが今回の展覧会に繋がっているのだと強く感じています。本展は有形文化財という特殊な場所での展示となりますので、そのシュチュエーションを活かした一風変わった展示を工夫して皆様に楽しんでいただけるよう努力していくつもりでおります。

「浦戸 歴史の風景」(2)

「リンドウ」とよばれて

土佐史談会会長
現代龍馬学会理事
宅間 一之

「リンドウ」それは浦戸のなまりであろう。天文9（1540）年ポルトガル人フェルナンド・メンデス・ピントの旅行記に北緯37度の「土佐島リンドウ」と見えるという。すでに浦戸の港が世界の貿易港としての殷賑を想像させる。その後も「ウランドウ」と呼ばれ土佐を代表する港として世界航海史にその名を輝かせ続けた。

承平4（934）年、紀貫之が国司の任終えて帰京の途次に綴った『土佐日記』、大津より船出して三里の地「うらと」に寄港の記録を残す。鎌倉時代、北条義時は浦戸の篠原孫左衛門らに『廻船大法』を作らせる。研究者はそれを後世の偽文書らしいと否定はしたが、この地に多くの航海者の存在は否定できない。室町期、対明貿易の中継港としの要港と史書は明記する。長宗我部元親はいち早く浦戸港を手中にする。そこには上方や九州からの情報が溢れくる。情報を得て来るべき外交戦に備えたであろう。のちにこの地への築城は彼の海への関心、港への関心の深さも物語る。

慶長元（1596）年9月のスペイン船サン・フェリペ号の漂着事件は、浦戸の名を一層広く世界の航海者たちに認識はさせたが、国内はキリスト教禁圧から鎖国へと予期せぬ国策に発展した。海への自由を奪い、航海も大阪や江戸、長崎近辺にかぎられ、漁業も近海にとどまった。船奉行樋口関太夫は南海に島あり、その探検をと藩主忠義に申し出たが望みはかなわず、浦戸港の名声も世界の航海史からは消えた。しかし開国は再び海に土佐の男たちをかりたてた。漂流から帰国し豊富な知識をもとに中浜万次郎は活動し、航海術を身につけ土佐海援隊長として勇躍する坂本龍馬、そして大きく三菱として成長する岩崎弥太郎ら、世界の海にはばたいた男たちも、港浦戸は忘れなかったろう。

浦戸風景

橋上から見下ろす浦戸の港、そこには貴之の見た「うらと」の風景も、サン・フェリペ号の船員たちを迎えた港もいまに伝えるものは何もない。しかし三方に山を負い、港口を北にひらいて波静かな浦戸の湾につながる要港の地形に変わりはない。湾内を吹く風に誘われておこるさざ波は、今日も港内に係留された漁船をかすかに揺すって、過ぎ去った歴史を語りあっている。

東吉野村エッセイ⑦

天誅組戦死者墓碑之図
～決死隊長 那須信吾の墓碑～

奈良県東吉野村
阪本 基義

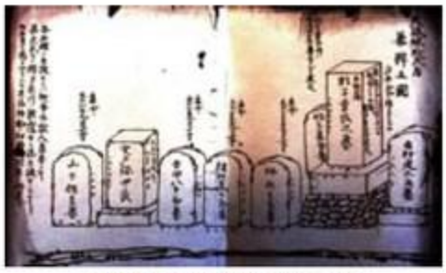
天誅組終焉の地と呼ばれる奈良県東吉野村には二箇所の合祀墓地がある。

文久3年（1863）9月、吉村虎太郎、松本奎堂、藤本鉄石の三総裁をはじめ十五名が戦死、東吉野を脱出した者も相次いで殺害・捕縛された。本村で戦死した土佐脱藩の天誅組志士、吉村虎太郎、那須信吾、吉田八十助（鍋島米之助）、森下幾馬の四名の首級は京都に送られたが遺骸は東吉野に埋葬されている。

「朝敵」「浮浪之徒」の汚名を着せられた天誅組志士の名誉回復は明治も中頃を過ぎてからである。その頃作成された文書に、事変後間もなく村人によって墓碑が建てられたことや祭祀のようすなどが記述されている。

「……各石碑ハ文久三年冬、村民中、左ノ人名其周旋ノ労ヲ執リ建設ス。其費用ハ衆人墓参シテ供スルトコロノ賽銭ヲ以テ充ツ。……右各人ハ石碑建設の周旋ヲナシタルタメ、文久四年（元治元年）秋十月頃、幕吏来テ石碑建設セシヲトガメ、取調ニ来テ七人各等周旋セシ事露顕シ遂ニ捕縛セラレ五條代官所ニ拘引三五日余リ獄屋ニ繋ガル……。」

9月24日、主将中山忠光脱出のため、決死隊に名乗りを上げ獅子奮迅の活躍を見せた那須信吾は彦根藩の銃弾にたおれた。



明治谷墓碑図（明治25年ころ）

明治谷墓地には、「天誅組戦死者墓碑之図」にある「那子眞吾墓」「土佐藩那子重良之墓」と現在の「贈従四位那須信吾墓」の三つの石碑がある。「那子眞吾墓」は事件直後の冬に鷲家口村の有志が明治谷に建立したものである。「那子重良之墓」碑の「那子」は、明らかに文書作成者の書き間違いで、どちらの墓碑にも「那須」、「那須重民」と彫られている。この碑は明治23年に長男重宗が墓参して建立したと註記がある。

長男重宗が東吉野へ来たのは讃岐鉄道が多度津―琴平で営業を始めたころである。土讃線（須崎―高松）の全面開通が昭和10年であることから考えて、父信吾戦死の地を訪ねる旅の苦労がしのばれる。

「墓碑之図」の左端に「各石碑ノ欠損セシハ戦后衆人墓参ノトキ幕吏来テ碑ヲ前川ニ転覆セシ為欠損セシモノナリ、台石等モ悉クアリシモ其後紛乱ス。村民相集メ再建ス」とあり、当時の天誅組の置かれた立場をよく伝えている。

第4回 終戦記念日に誓う　夏休み子ども・龍馬フォーラム

PEACE ピース ～平和・つなぐ～

3グループそれぞれの発表に学んだ一日

8月15日、県内外から小中学生、高校生18人が集合し、「夏休み子ども・龍馬フォーラム」を開催しました。

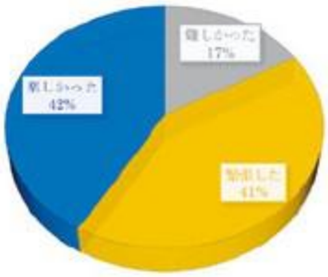
今年のテーマは、『PEACEピース～平和・つなぐ』。

龍馬がかかわった薩長同盟から150年。龍馬が遠くに望んだものは"平和"だと思います。「今。日本は、世界は、平和ですか？」「私たちはどんな行動をすればいいのでしょうか」。みんなで考えました。

初回から参加し、「サダコの折り鶴」という平和のメッセージを世界に広げているハワイ・プナホースクールのひろみピーターソン先生のお話に続いて、昨年からの参加者、高知市立一ツ橋小学校の仁井田紘季くんの学校での取り組みが発表されました。また、長く機内乗務員として日米で働いているユナイテッド航空の森木房恵さんからは、ジョンマンを通じたメッセージをいただきました。

子どもフォーラムの小さな取り組みとして、参加者みんなで折り鶴を折り、ハワイに贈ることにしました。参加者の声から今年の成果をご報告します。

フォーラムに参加した感想



- 初めての参加でとても緊張したが、学芸員の方がサポートをしてくれ、グループでも楽しく意見交換ができた。
- 自分から発言できたし、ハワイに行って来た仁井田君の感想を聞けてよかった。
- たくさんの友達ができ、ほかの人の意見も聞けて、平和について話し合え勉強になった。
- マイクを持ったことがなく、間違えず発表しようと必死で、書いてあることをまとめて発表するときには緊張した。

印象に残っていることは？

- サダコプロジェクトは聞いたことがなかった。そして平和についてもっと学ぶことができた。グループでは龍馬だけではなく他の偉人からも学ぶことができた。
- みんなが平和についてどのような考えを持っているか分かった。良いことの手本になることを自分の心と龍馬に誓えた。
- いちむじんの方とお話ができたり、折り鶴を森木さんがわかりやすく折り方を教えてくれたのでやりやすかった。
- 薩長同盟の話を聞いたことが一番印象に残った。
- 薩長同盟の確認のための裏書きを、龍馬が赤い字で書いてあり「薩長の強い同盟関係をこれから作っていくぜよ！」と力強く龍馬が言っているような気がして印象的だった。

（アンケートまとめ・宮崎圭子）

【保護者の意見・感想】

- 貴重な経験をさせていただきました。とても楽しみにしていました。
- 異年齢の子供たちが1つのテーブルで自分の考えを言い、相手の話を聞き考え発表するのは良いことだと思います。ただ緊張しすぎて思ったことをあまり伝えられなかったようです。龍馬（幕末）と平和というテーマは現代とも近いものがある様に感じます。これからもフォーラムを続けてほしい。また参加出来ればいいなと思っています。
- 折り鶴が平和の種になっている事、仁井田紘季くんが諦めずに頑張った事、折り鶴が世界中に羽ばたいていることを知り、感動で涙が出そうになりました。森木さん、学芸員さんの興味深いお話も聞け、見学した兄も刺激を受けたようです。いちむじんの澄んだ音色の演奏も素敵でした。充実した1日を過ごすことができ参加して本当に良かったです。ありがとうございました。
- 今回初めての参加。親子共にとても良い勉強、経験をさせていただきありがとうございました。戦争や平和について考える機会が少なくなっている中、子供たちに「平和」という意味を深く考えてこれからも引き継いでいかなければならない事を改めて実感しました。来年は中学生になります。仁井田くんの勇気を我が家にも教えてもらいました。

- 最初は中学生だからと司会、発表者に決められたと、休み時間は泣きながら話していました。家に帰そうかとも考えましたが、子どもは最後までやりました。ワークショップ形式だったので、離れていても様子が確認でき、終わってからも「友達ができてよかった」と聞き、自分で頑張ってくれてよかったと思いました。フォーラムの役割は平和のことを話すだけでなく、龍馬の精神を引き継いだ会であることを実感することができました。時代は違っても龍馬の懐で子どもたちの会が開かれていたと、うれしく、子ども自身も自分を理解してくれる、自分の存在を認めてもらえた居場所を見つけた1日であったと思います。

参加した親子はこの経験を無駄にしません。永遠に将来を担う子供たちに引き継がれていきます。高知県以外の参加者も増えて会が継続されたら素晴らしいと思いました。本来の研究とは少し違うかもしれませんが、龍馬の意志を一番多く身近で理解されている皆様だからこそできる企画です。これからもよろしくお願いいたします。

拝啓 龍馬殿

平成28年6月21日～9月20日

105通

「ハイハイエヘン」

初めての桂浜はあいにくの曇りですが、荒れた海も波飛沫も旅の思い出になりそうです。学生の頃には興味のもてなかった歴史も、きっかけは「竜馬がゆく」から始まり、幕末という大きな流れへ動いています。社会に出て、毎日を過ごす中で坂本龍馬の力強く生きる姿に元気をもらい、同時に私も何かやりとげたいと願わずにはいられません。"ハイハイエヘン"と、自信をもって私のやりたいことへ進んでいけるよう見守って欲しいものです。かしこ。

（7月11日　福岡　K・M　26歳　女性）

「日本食を子どもたちに」

会社の社員旅行で高知まで来ました。日本を変えた坂本龍馬さんのような男になるため力をもらいに来ました。日本文化である和食を未来ある子どもたちに伝えられる男になるよう努力します。

（7月13日　京都　M・M　36歳　男性）

「今必要なことは？」

今日も世界中でテロが発生し、何の罪もない多くの命が無残に奪われています。それはこの日本から離れた地の出来事だと見過ごできないほど差し迫った問題になってきています。世界は益々情報でつながって速度が増しているのに、宗教やプライオリティといった心の拠り所は全く近づいていません。龍馬さん、今必要なことは何ですか？高度に発達したと思われる現代なのに、このどこかうらさみしい感じは何なのでしょう。それは気概や気迫ぜよ、と言われる気がします。この記念館がそう叫んでいるように思います。

（7月16日　愛知　S・O　46歳　男性）

「息子が龍馬ファン」

10年前に、友人とこの記念館を訪れました。そして今日は夫、息子（7才）と再び訪れることができました。昨年小学校に入学した息子は、学校の図書館で坂本龍馬の本と出会い、すっかりファンになりました。今日の訪問も、息子の強い希望あってのものです。日本を一つにという志を持って、勇ましく行動した龍馬にあこがれているようです。龍馬の言葉のように、太平洋のように広い心を持ち、いつも笑顔でいられるよう、龍馬も見ていたであろう桂浜の風景を3人でじっくり味わって帰りたいと思います。息子が歴史に興味を持つきっかけを与えてくれた龍馬に感謝しています。

（7月17日　静岡　M・S　36歳　女性）

「鉄の馬で！」

今日も、太平洋と龍馬さんに逢いたくて、備前の国（岡山）から来ました。私には小さな夢があります。仕事をリタイヤしたら、鉄の馬（バイク）で日本国中を駆けまわることです。龍馬さんも一緒に行きませんか？その時は、私を陸援隊の副隊長にしてくださいな！（笑）逢いたくなったらまた来ます。

（7月17日　岡山　T・M　56歳　男性）

「ぼくはりょうま」

ぼくの父さんは、ぼくにりょうまという名前をつけました。漢字は違うけど同じ名前なのでうれしいです。初めてりょうま記念館に来て、りょうまのことがわかってよかったです。天気もよくて海がきれいで気持ちよかったです。

（7月19日　広島　R・T　12歳　男性）

「人生を今一度せんたく」

やっと念願のこの桂浜に来れました。貴方様の足跡を想うべく、どうしても此処に来たかったのです。残りの人生今一度せんたくし頑張って活きていこうと思います。いい思い出をありがとうございます。

（7月22日　大阪　M・A　53歳　男性）

「自由な龍馬に憧れて」

やっぱり来たぜよ龍馬殿！高松に用件があって四国へ来た訳ですが、その用件を終えてから「さ～てと！」と思った途端「龍馬館、龍馬館！」と云う次第であります。新しい企画展示「龍馬の評価展－坂本龍馬の実像は？」を楽しみにして来ました。以下、私の持論です。誰が何を云おうとも、あの時代において、図解入りの絵手紙を書いたその感覚、その意識を取り上げただけでも、龍馬の物事にこだわらない性格を推し量るには十分すぎるように思えてなりません。如何に自由な考え、そして色んな枠に囚われずに物事を処

ここは館長の部屋　髙松　清之

坂本直寛が入植した北海道

先日、龍馬の姉の一人「千鶴」が嫁いだ先である安田町の教育委員会の御好意で、龍馬の甥にあたる坂本直寛が一家をあげて入植した北海道の浦臼町を訪ね、交流を深める機会を得た。

龍馬の積年の夢を引き継ぐかのように直寛が最初に北海道に渡ったのは明治29年の夏であった。直寛の北海道開拓と言えば、現在の北見市を開拓するために設立し、初代の社長を務めた合資会社「北光社」を思い起こす人も多いと思うが、実際に彼が開拓生活を送った期間、そして、開拓活動の密度は、浦臼のほうが長く、濃密であったようである。

浦臼町の教育長さんや職員の方のご案内で、石狩川の畔に立つ直寛の住居跡を示す案内板の前に立ち、はるか遠くの山並と石狩川の流れを眺望しながら、今では想像もできない様々な困難や不自由もある中、凍てつく冬の北の大地での当時の暮らしぶりに思いを馳せ、感慨も一入であった。

町長さんや教育長さんからは、浦臼開拓に纏わる色々な興味深いお話を伺うことができたが、特に印象深かったのは、高知県や徳島県などからの開拓団が浦臼に入植し、その後の暮らしの礎を築くことができたのは、明治20年代の前半に、隣町である月形町に設置されていた樺戸集治監に収容されていた囚人たち（当時の囚人には西南戦争をはじめとする維新の動乱に関わった政治犯も多かったとのこと）の手によって増毛街道（現在の国道275号）が開削されたことによるところが大きいとのお話であった。

中国の故事成句に「飲水思源」、また、「喝水不忘掘井人」とあり、水を飲む時には井戸を掘った人の苦労を忘れてはならぬといわれるが、浦臼を拓いた人たちの功績を昨日のことのように熱い思いをもって語ってくれる町長さんをはじめ浦臼の方々の心に、改めて敬服と感謝の気持ちで一杯になった。

理して行く人間であったかを思う時、日常生活に色々と束縛を感ずる自分にとって龍馬は憧れであります。この歳にしても尚…、字数制限枠有りにて、この辺で失礼します（笑）

（7月30日　富山　T・K　72歳　男性）

「三度の飯より龍馬好き」

私は4才から父の影響で坂本龍馬のことが大好きな中学三年生です。三度の飯より龍馬のことを想っています。幕末の夜明けを見る前に亡くなった無念さは今の僕と重なります。龍馬さん！これからも応援しています！

（8月3日　15歳　男子）

「教育に携わる者として」

「竜馬がゆく」を読んで、あなたのすばらしさを感じました。日本のことを真剣に考え、行動したことが心に残っています。乙女姉さんのように自分の事を信じてくれる人の存在は大切なものだと思います。もし今、話が聞けるとしたら、どんなことを思っているのか、とても知りたいものです。特に気になるのは、今の日本の学校や教育のことをどう感じているかです。龍馬殿のような、子どものころは目立たない子どもでも、信じてくれる人がいて、支えてくれる人によって、大きく成長する可能性をひめている人が、きっとたくさんいるのだろうと思います。直接、教育に携わる者として、意見を聞きたいところです。

（8月4日　福井　H・K　56歳　男性）

「パアパより」

三重から、7才の男の子と女の子が初めて来ました。海の道を見て感動しました。

（8月5日　三重　パアパ　63歳　女性）

「手をつなぎたい」

さかもとりょうまさんがすきで、ほんもののりょうまさんと手をつないでみたい。

（8月9日　7歳　女子）

「毎年来ています」

はじめまして龍馬様。あなたが体を張って変えようとした日本は今は満足できていますか？小さな事で考え込む日々が多く、なかなか前を向いて行けません。今日この地に立てたことで前を向いて行けたら良いです。毎年来ています。これからも高知大好きです。

（8月11日　東京　F・A　43歳　女性）

「日本一周中」

僕は今、日本一周をして、この大好きな日本を自分の目で見てまわっています。龍馬さんのお陰で日本は今や世界に誇れる国になりました。まだまだ問題は山積みですが、日本の事を真剣に考える人たちのお陰で、まだまだ成長できそうです。僕も日本という国はどんな国か、今はどういう国になっているのかをハッキリ知って、これからの日本を自分なりに考えようと思います。この国あっての今の僕だし、日本に生まれてよかったと思っています。こんなに優しい国を作ってくれてありがとうございます。一生を懸けて恩返しします。

（7月29日　福岡　M・T　20歳　男性）

「龍馬に願いを」

子ども達が自らの志を持ってそれに向かって努力することができますように。勇気をもって自分の信じた道を進めますように。それを見守ることができますように。

（8月25日　45歳　女性）

＊＊＊編集者より＊＊＊

この「拝啓龍馬殿」は館内に2か所の記入スペースがあります。そのうちの1か所を、夏休み限定で、子ども龍馬フォーラム関連スペースに変更し、入館者の皆様に平和への願いを込めて"折り鶴"を折っていただくコーナーを設置しました。設置するとすぐに、小学生の女の子が家族で折り鶴を折ってくれました。夏休み中、折り鶴コーナーの周りは人が絶えることがなく、いつも誰かが一生懸命に鶴を折ってくれていました。鶴の折り方を忘れてしまったというお父さんに娘さんが折り方を教えてあげていたり、おばあちゃんがお孫さんに教えてあげていたりと、"折り鶴が家族をつなぐ"素敵な場面もたくさん見られました。これらの折り鶴は、ハワイに送り、真珠湾（パールハーバー）の記念館を訪れた世界各国の人々にお渡しします。ご協力いただいた皆様本当にありがとうございました。　尾﨑　由紀

今年はひと味ちがうぜよ！

レッツゴー！ハンドインハンド2016

2016年11月13日（日）開催

当館は、2018年春のグランドオープンに向けて、来年4月から休館いたします。来館者の皆様、関係者の皆様にこれまでの感謝を込めて、皆様に喜んでいただけるイベントを多数ご用意いたしました。さらに今年は桂浜公園で開催中の「龍馬まつり」へも特別出展。龍馬まつりとあわせて、桂浜で「日中お楽しみいただけます。グランドオープンという「新しい"始まり"」へ向けて、皆様と手をつなぐとともに、未来に心をつなぎます。

今回は龍馬記念館周辺の5つの会場で様々なイベントを開催します。第1～3会場は龍馬記念館、第4会場は国民宿舎桂浜荘、そして第5会場は龍馬まつりの行われる桂浜公園です。

メインイベントである「レッツゴー！ハンドインハンド」は、シェイクハンド龍馬像を起点・終点として、龍馬記念館の館内を参加者の皆様の握手でつなぎます。開館から25年間、多くの方々に親しんでいただいた龍馬記念館の館内を巡ります。参加者には、参加賞の他、5名様に龍馬記念館オリジナルグッズ詰め合わせが当たる抽選会もあります。

エントランススペースにはお子様が楽しめるイベントを用意。「龍馬気分で射的に挑戦！」（小中学生対象、1回100円）はピストル風おもちゃで的を狙うゲーム。見事当たれば豪華りょうまグッズをプレゼント☆

記念館2階近江屋では「幕末龍馬塾」を開催。龍馬を良く知る学芸員のお話や、龍馬好きのメンバーが集まって結成した劇団の公演をご堪能ください。

桂浜荘では「お香とお話を聞く会」を開催。「古心流」香道の先生をお招きして、龍馬にちなんだお香を楽しみます。

龍馬まつり会場では、龍馬に関するパネル展示の他、龍馬記念館で大好評の"龍馬の文字で名刺を作れる"コーナーも出張します。「龍馬こども検定」（小中学生対象）で合格点をとると龍馬グッズをプレゼント。

どの時間に来ても、どの年代の方でもお楽しみいただけますので、皆さまお誘いあわせのうえぜひご参加ください。

「レッツゴー！ハンドインハンド」「お香とお話を聞く会」は事前申し込みが必要です。電話でお申し込みください。尾﨑　由紀

建立からまもなく5年となるシェイクハンド龍馬像。たくさんの人たちとつながってきたその手は、金色を通り越して不思議な輝きを放っている。

海の見える・ぎゃらりい

■ 五感に響いた「石見陽奈 個展」&泥臭い人間味を描き続ける「楠本剛 作品展」

海をのぞむ

9月の"海の見える・ぎゃらりい"は、当ぎゃらりいでは初めての「石見陽奈 個展 "とおくをみる"」を開催した。"常に未来を、遠くを見ようとしていたであろう龍馬の目線"も意識したという大小10点の作品は、桂浜の海を含む風景や動植物が描かれていた。今回、手法を洋画から日本画に変えて描き始めたという作品群の印象は、落ち着いた静けさの中に様々な動を感じるものであった。

海へあるく

最大の作品「海をのぞむ」〈860㎜×2000㎜〉は、桂浜の龍王岬と龍頭岬が一つの画面にシンメトリーに描かれており、正面に立つと、たちまち打ち寄せて来る白波の音や遠くの海の響きがなんとも心地よく聴こえてきた。また「海へあるく」〈1120㎜×1460㎜〉は、樹々の間を吹き抜けてゆく海風に、早春のやわらかい暖かさと潮の香を感じた。

日常何気なく行っている「みる」という行為に焦点を当てた今回の展覧会では、「みる」を改めて意識することで、五感を繊細に優しく刺激してくれる空間と作品がうまく調和した展覧会となった。

＊「龍馬と志士たち 楠本 剛 作品」展10月1日～12月3日。

"海の見える・ぎゃらりい"では6回目の展覧会となる兵庫県のアーティスト楠本剛さんの新作展である。龍馬をこよなく愛する楠本さんの作品は、その時の気持ちやひらめきにより、作品におけるタッチや色合いを自在に変え、潔く描き切るところに特徴がある。

今回の展覧会は、ここ10年ほど子供向けに紙芝居や絵本に描いてきた明るい色使いの龍馬や土佐の人物よりも、墨絵の様なタッチに渋めの色合いを使って描かれた作品が多い。ご自身、「かねてから棟方志功や円空の作品に関心があり、今回はその影響が微妙に出ているかもしれない」と言う言葉通り、沖田総司を描いた作品「池田屋」は、人物を縁取る黒色の大胆さと思い切りの良さに、版画の魅力と重なる力強さを感じる。一方「土佐四天王」は、絵手紙のように文章が綴られ、色使いも人物もいつもの柔和な印象を受けるユニークな作品に仕上がっている。

池田屋

土佐四天王

「近年、メディアの影響で"龍馬"のイメージがどんどん変わっていく中、これからも泥臭い人間味ある龍馬さんや幕末の人物を描き続けたい」と語る楠本さんの作品をお楽しみください。

また、11月13日(日)には年に一度記念館の近江屋だけで観られる、恒例"劇団志士座乙女座"(ご自身の劇団)の公演「幕末動乱～さらば同志たち～」も上演されます。(10時、14時)

中村　昌代

＊"海の見える・ぎゃらりい"年間スケジュールの変更

- 10月1日(土)～12月3日(土)「龍馬と志士たち 楠本 剛 作品」展
- 12月4日(日)～2016年1月10日(火)
  「終戦記念日に誓う！ 第4回 夏休み子ども・龍馬フォーラム」報告展
- 1月11日(水)～3月31日(金)「海の見える・ぎゃらりい 11年間の軌跡」展

入館状況

2016年9月20日現在（開館以来9,033日）

◆総入館者数		3,880,116人
◆最多入館	(2010年5月2日)	6,686人
◆最少入館	(2004年10月20日、台風のため)	8人
◆2016年度最多入館	(2016年5月4日)	2,098人
◆2016年度最少入館	(2016年4月28日)	99人

編集後記

"時の鐘"が聴こえるような気分である。心が急く。

開館以来続くこの「飛騰」は今号で99号。次号正月には100号を迎える。積み重ねてきた歳月は重く尊い。そして、いよいよ今月下旬には新館建設のための基礎工事が始まる。

また、今月15日からは京都国立博物館では特別展覧会「龍馬没後150年・坂本龍馬」スタート。「龍馬の駆けた時代」以来12年ぶりのの大規模な龍馬展である。当館の資料も出張する。「飛騰100号」発行の来年1月には、当館初めての県外巡回展も始動する。岡山、熊本、東京、広島と、各地は動いている。

「万里一空」目的を見失うことなく精進する心持を忘れまい。秋本番。天も地も澄み渡る。　(ゆ)

館だより"飛　騰"第99号（年4回発行）表紙題字：書家 沢田 明子氏
発行日　2016(平成28)年10月1日
発　行　公益財団法人高知県文化財団
高知県立坂本龍馬記念館
〒781-0262 高知市浦戸城山830
TEL (088)841-0001　FAX (088)841-0015
http://www.ryoma-kinenkan.jp
「飛騰」に対するご意見ご感想などお寄せください

開館時間　9:00～17:00　年中無休
入 館 料　一般500円・高校生以下無料
身体障害者手帳・療育手帳・精神障害者保健福祉手帳・戦傷病者手帳・被爆者健康手帳所持者とその介護者1名
高知県・高知市長寿手帳所持者は無料

休館のご案内

新館増築・既存館改修工事のため、平成29年4月から約1年間全面休館いたします。グランドオープンは平成30年春を予定しています。(工事に伴いバス駐車場はご利用できません。普通車の方は臨時駐車場のご利用となります。大変ご不便をおかけいたしますがよろしくお願いいたします。)

館だより「飛騰」は、郵送料のみのご負担でお届けいたします。ご希望の方は、92円切手5枚をお送りください

私のテーマ

龍馬暗殺の謎・黒幕は誰だ？土佐藩犯人説への考察（下）

「私論として」

小島　博明

暗殺2日前からの動き

後藤象二郎は、福岡孝弟らに「やがて坂本君も越前より帰京するが、賠償金を受領したと商会より連絡があるまで坂本君を長崎に行かさぬように」と念を押した。

福岡は龍馬の旅宿『近江屋』の隣家の酒屋に下宿していた事も有り、良策を持っていた。

京都にはその当時、京都町奉行所と新たに加わった『新選組』と『見廻組』の三つの警察組織が有り、その中で京都町奉行を務め若年寄でもあった永井尚志とは昵懇の仲であった。つい先にも宮川助五郎（前年の9月には三条大橋西詰の高札場の高札を鴨川に投げ捨てた罪で入牢中）を、そろそろ引き取ってくれぬか、との話があったのだ。福岡は越前から帰った龍馬を何度か永井の屋敷に連れて行き龍馬の警戒心を解いていた。

11月13日、龍馬は遂に行動を起す。「紀州藩が言を左右にして賠償金を支払わないので岡内俊太郎を土佐へ中島作太郎を長崎に派遣し督促に行かせる」。また「自分も数日後には坂本清次郎（兄権平の一人娘・春猪の婿養子）と長崎に行く」と言う。

福岡は覚悟を決める。土佐藩の為だ。14日に龍馬の長崎行を阻止する為、「永井殿より指示あり次第、京都町奉行所に行き宮川助五郎を受け取ってくる様に」と命令を下した。

長崎『土佐商会』の役人であった。（池道之助の日記によると紀州より11月4日に三千両、12日にも賠償金と思われる多額の金を受け取っているが、この報告は今だ届いてはいなかったのだろう）。

15日神山佐多衛は部下に命じ秘かに宮川助五郎を奉行所より受け出し河原町の土佐屋敷の内牢に入れた。龍馬が奉行所に行くと、その場で捕縛するとの策略であった。

龍馬『近江屋』に散る＝カット画・和田通博

龍馬暗殺の日

慶応3年11月15日（西暦1867年12月10日）その日は朝から冷たい雨が降り寒さ厳しい日であったと言う。

この日神山佐多衛と福岡藤次は薩摩の田中幸助（アリバイ工作か？）と祇園に遊び、寺村左膳は四条大橋東詰にて芝居見物に行っていたそうで、宿に帰って初めて坂本龍馬の旅宿『近江屋』が襲撃され坂本龍馬は即死、中岡慎太郎と若党の山田藤吉が虫の息だと知らされた。

この時、福岡は龍馬の在宅を確かめに来た刺客の一人（桂隼之助）が自分の宿にも訪ねて来たと従者の和田に聞き、顔面蒼白となり宿に籠り考え込んでしまった。

後に福岡孝弟子爵夫人となるおかよは不審に思い「龍馬さん等の御見送りに行かないのですか？」と尋ねると、普段物静かな福岡が「貴様などの知った事でない！」と一喝したと言う。よほどのショックだった様だ。

奉行所に捕縛されているはずが、宿である『近江屋』で暗殺されたのだ。やはり『新選組』の仕業か？それとも永井尚志の手の者か？まさか…。

虫の息だった藤吉は16日に、慎太郎は17日に息を引き取ったと言う。坂本龍馬は33才の生誕日であった。慎太郎は30才、藤吉は19才の若さであったと言う。

龍馬は全身に34ケ所、慎太郎は28ケ所、藤吉は7ケ所の刀傷があったと言う。

暗殺の真犯人と黒幕は？

明治になって元『見廻組』隊士、今井信郎と渡辺篤の証言により、実行犯は判明した。渡辺篤の話では、龍馬を切ったのは自分であり、慎太郎は今井信郎が、藤吉は世良俊三が切ったとし（この時、刀の鞘を落とす）、今井信郎は、桂隼之助と渡辺安太郎が階上で襲撃に加わり、高橋安次郎、土肥作蔵と桜井大三郎が階下で見張り役をしていたと言う。『見廻組』与頭、佐々木唯三郎が検分役として立合ったそうだ。

だが今井信郎と渡辺篤の他は、鳥羽伏見の戦で戦死している。又、渡辺篤の坂本龍馬を切った脇差は『京都見廻組』総頭、信州飯田藩主、堀石見守親広より拝領の会津藩工、大和守秀国、一尺余であったと言い、褒美として十人扶持が家禄に加えられたと証言している。とすると京都の警察組織の一つである『見廻組』単独の犯行となり、いわゆる政治的な黒幕は存在しない事になる。

又、後藤象二郎は、11月3日付で容堂公より『大政奉還』の成立による論功行賞として、馬廻役の家格が御中老に昇格し、百五十石の家禄が千五百石に加増され、破格の大出世を遂げた。同月、象二郎の手配にて岩崎弥太郎も父弥次郎の代で地下浪人であった家格が、留守居組（上士）に昇格し、『土佐商会』副主任となった。

薩摩の五代才助には立合料として、過分の二千両が支払われた。

――（上）（下）と書いたこれらの内容はあくまでも私個人の考察です。皆様はどう思われますか？

また、（上）でのイカルス号事件における山内容堂とパークスの件については、5月の現代龍馬学会で発表された今井章博氏の「大町桂月の『伯爵後藤象二郎』余話」から引用させていただきました。

が惚れる男”

アに　造形作家 藤原 豊 さん

藤原豊さんの作るフィギュア（キャラクター人形）は細部まで丁寧に作っている。人物は実際の身長を検証して、8分の1サイズとする。そのため、坂本龍馬、中岡慎太郎、武市半平太、勝海舟、西郷隆盛らの身長差は歴然だ。その上、それぞれの人が語りかけてくるような表情をしている。

中でも龍馬が面白い。立ったり座ったりという写真のポーズだけでなく、笑っている龍馬もいて、実に生き生きとしている。

さほど入念なフィギュア作品は、すべて独学の趣味で作ったものだという。「記念館に置いてもらえるだけでうれしいんです」と笑う藤原さん。なんと本業は会社員で、仕事を終えてからの時間、コツコツ製作しているという。

記念館二階にある11体のフィギュアを入れたケースの前では、じっと見つめたり、写真を撮ったりする人の姿があとを絶たない。多くの人が藤原さんのフィギュアに魅せられている。

夏休みの終わり。汗を拭きながら記念館を訪ねてくれた藤原さんに、龍馬への思いなど聞いてみた。

二十歳の誕生プレゼントに『竜馬がゆく』

――外は暑かったでしょう。はるばる西宮からお越しいただき、ご苦労さまです。藤原さんは「本当に龍馬が好き」というオーラが出ていますが、龍馬との出会いなどお聞きしたいです。

まず、私は坂本龍馬と同じ11月生まれです（笑）。神戸生まれということもあって、龍馬も慕った楠正成公、まあ、神戸っ子にとっては楠公さんですね。その楠公さんゆかりの湊川にある「楠幼稚園」に通っていました。小学校でも楠公さんのことは勉強しますしね。また、僕にも乙女姉さんと同じように3歳違いの姉がいます。

それよりも何よりも、僕の二十歳の誕生日に、会社の先輩が司馬遼太郎さんの『竜馬がゆく』文庫八巻をプレゼントしてくれたんですね。それまでは戦国時代と幕末がごっちゃだったくらいですけど、一気に読みました。龍馬にしびれましたね。

何しろ、2カ月後の翌年（1989年）1月15日の成人式には高知の桂浜に来ていましたからね（笑）。高知駅前では龍馬記念館建設のための募金活動もしていて、僕も寄付しました。この年だけでも高知には3回来ました。

司馬作品もほとんど読んで、司馬ファンにもなりました。

龍馬は男の理想像

――それはすごいですね。龍馬のどこに惹かれたんですか。

『竜馬がゆく』は面白いのですが、僕には時代背景が分からなかった。だから本はたくさん読みましたね。自宅自室の壁一面の本棚は龍馬関係の本で埋まっています。

とにかく龍馬は器がでかいですよ。

それに、僕にないものを持っている。女や老人にやさしい。姉さんに甘えることもできる。佐々木高行が言うてた「坂本は目的を定めたら、どんな手段を使ってもやり遂げた」というこ

とですね。僕はできません（笑）。

龍馬の手紙はメチャクチャ好きです。何度も何度も読みました。話し方のうまさや人間臭さが伝わってきます。自分が迷っているときなど、龍馬が「こっちやで」と言うてくれてるみたいです。

つまり、龍馬は自分が理想とする男性に当てはまるものばかりなんです。男としての理想像ですね。

――男が惚れる男ということですね。分かる気がします。

そんな藤原さんが龍馬たちのフィギュアを作ることになったのはどういったきっかけなんでしょう。どこかで学んだのですか。

僕はもともと趣味でプラモデルを作っていました。『竜馬がゆく』を読んだ2年後くらいから、徐々にフィギュアを作り始めたんですね。

フィギュアの原点は二十歳のとき、高知に初めて来たときに買った龍馬像なんです。店で売ってた中で一番大きな像で、30年近く前に一万二千円くらいでした。けっこう高かったなあ（笑）。今でも自分の部屋の一番いい所に飾っています。

制作はすべて独学です。工具

話題人インタビュー

龍馬は“男

龍馬の心をフィギュ

もデザインナイフだけでなく耳かきや爪楊枝を使うなど、自分なりの工夫をして作っています。

龍馬の心情に向き合うフィギュアづくり

――フィギュアつくりを楽しんでいらっしゃるようですね。本業は会社員だとお聞きしましたが。

そうですよ。本業は電子機器メーカーの営業マン、つまり会社員です。仕事が終わって家に帰ってから、夜コツコツと趣味で作っています。何というのかな、自分や龍馬と向き合う時間というのかな。楽しいですよ。

初めは立位の写真を見ながら作り始めましたが、これだけでは立体的な龍馬は分かりません。昭和63（1988）年だったか、縁台に座る龍馬の写真が見つかりましたね。そのおかげで、耳の形がはっきり分かりました。

平面から立体を作る過程では、文献を読んで性格付けをしていきます。ただ、文献をなぞるだけでは表情は生まれません。想像力も重要ですね。

縁台に座っている龍馬の羽織はピシッと決まっている。やはり福井に訪ねたときかなと考える。寺田屋で襲われた後、手に傷があるのに、ブーツをわざと見せている。そこに龍馬の性格を考えます。

龍馬に限らないかもしれませんが、武士は命の使い方が今とは違う。〝私〟のためには使わない。〝公〟に使うことこそ美しく潔いと思っている。そんな龍馬の心情がフィギュアに反映できればうれしいですね。

龍馬と関わり続けたい

――いろいろな思いと努力で作ったフィギュアを記念館に寄贈される。その心意気って何なんですか。

2年前の2014年。私は記念館に「私のフィギュアを記念館の片隅にでも置いてもらえませんか」とメールを送りました。すると、森健志郎・前館長から「ぜひやろう！」と返信をいただきました。嬉しくて、飛んできました。西宮から車で4時間くらいですからね。

フィギュアは僕の内面にあるものを形にしています。自分の手によって龍馬の新しい面が出てくる。それをやはり龍馬を知る方たちに見ていただく。実は恥ずかしくもあり、嬉しくもある。自己満足と思われるかもしれませんが、〝龍馬〟と少しでも関わりたいという気持ちもあります。

――こちらまで嬉しく弾んでくるような動機ですね。龍馬の心情をつかむことが、フィギュアの形を作るうえで大事なんですね。

そうです。龍馬って臨機応変というか、道は一本だけじゃないということを教えてくれるけど、目的がぶれない生き方をしている。今でも仕事が終わって1、2時間は本を読み直して、龍馬の生き方を考えています。

僕は五十歳近くなりましたが、いまだに超えることは無理です。そんな、めっちゃでかい男、根性が座った男を相手にするなんて、たちが悪いんです（笑）。自分が困ったとき、悩んだときに、龍馬は現れて「ぶんと屁のなるほどやってみよ」なんて言う。男として一番カッコいいでしょ。かないっこない。

――確かにね。だけど、藤原さんのフィギュアを記念館で見て、影響を受ける人もいますよね。〝紙の魔術師〟といわれるペーパーアーチスト太田隆司さんもその一人。幕末の人たちの身長差を初めて知ったとも言っていました。

それにしても、フィギュアの表情やしぐさ、雰囲気は藤原さんと似ていますね。キーワードは「カッコいい男」（笑）。

そんなに言われると照れくさいなあ。でも素直に嬉しいですね。人生の半分以上龍馬とつき合ってきましたからね。

今、記念館に展示していただいている龍馬、慎太郎、武市、西郷、勝、慶喜公、高杉、土方は実際の身長を調べて、すべて8分の1スケールで作っています。僕のそんなこだわりがアーチスト太田さんの目に留まり役に立ったというなら、これからも地道に作り続けて行く力になりますね。

話が終わり、席を立った藤原さん。長身の後ろ姿に龍馬が重なった。

profile

藤原 豊（ふじわら・ゆたか）

造形作家、会社員。

JAPANミリテールフォーラム会員。1968年兵庫県神戸市生まれ、西宮市在住。20歳のとき「竜馬がゆく」（司馬遼太郎）を読んで以来の龍馬ファン。趣味のプラモデル作りからフィギュア製作に移り、龍馬フィギュアなどをコツコツ製作してきた。2014年から記念館に作品を寄贈。その作品は、ペーパーアーチスト太田隆司さんにも影響を与えている。

インタビュアー

前田 由紀枝（まえだ・ゆきえ）

現代龍馬学会理事
高知県立坂本龍馬記念館学芸課長

こぼれ話 ― 犬歩棒当記（二十七）―

「父親のよろこび」

宮川　禎一

京都国立博物館で坂本龍馬関係資料を扱う者として龍馬資料の隅々まで知っていたつもりだったが、恥ずかしながらごく最近になって判ったことがある。

それは日根野弁治が発行した「小栗流和兵法目録」（嘉永6年3月）および「小栗流十二箇条并二十五箇条」（嘉永七年閏七月）（いずれも重要文化財。この二巻の間は龍馬の第一次江戸修行中）の巻物を納めた木箱のことである。これまで中身の巻物のことばかり気にしていたが、実は箱の裏側、底面に墨書があることに今年になってやっと気付いたのだ。それが結構重要な記載であった。

蓋の表の題字は日根野弁治先生の文字であろう。しかしその裏側の文字の書風は表とは全く異なる。その記載とは前者が「直陰十九歳春」（写真①）後者が「直陰廿歳秋」（写真②）というものだ。（直陰は龍馬の本名、のちに直柔と改称）こんな書き方をするのは日根野弁治先生でもなく、龍馬本人でもなく、乙女姉さんでもなく、父親の坂本八平以外には考えられないことだ。その大胆奔放な文字の雰囲気も「修行中心得大意」に似ているようだ。

すなわちこの巻物の箱裏に龍馬の年齢を書き入れたのは父八平であって、龍馬が通っていた剣術道場の先生からこの木箱入の巻物をもらって来た際に龍馬の年齢季節を箱の裏側に墨で書いたのだ。わが子の成長を喜んだ様子をこの書付に観取することが出来よう。坂本八平が亡くなったのは後者の目録をもらった翌年の安政2年12月のことであった。八平は幕末における龍馬の大活躍を知らないが、息子の剣術の上達を父親として素直に嬉しく思っていたことをこんな形で後世の私たちに知らせてくれたのである。

写真①

写真②

コラム・龍馬のこと

「九反田開成館」

九反田開成館をもっと知ろう会　会長　井倉　俊一郎

150年前土佐が日本国でトップランナーだった頃、慶応2(1866)年2月高知城東九反田に土佐藩の総合商社開成館が設立された。

慶応2～3年この2年あまりの期間、九反田開成館に所属しながら土佐国（藩）の土佐人が幕藩体制の終焉を武力革命でなくなしえたことはなぜか。安政元年（1854）容堂、象二郎はいちはやく万次郎により海外情勢を知り、富国強兵に備え海外貿易の拠点（開成館）を構築していた。また同時期龍馬も河田小龍から万次郎の海外事情のレクチャーを受けていたことで、国防の必要性を理解していた。彌太郎も江戸留学と吉田東洋から教えを乞うた少林塾で、海外との貿易の必要性は感じていただろう。

慶応2年（1866）龍馬は他国（外藩）との折衝に奔走していたその情報を踏まえ長崎清風亭会談後　象二郎と龍馬は車の両輪となり、海援隊隊長坂本龍馬が“船中八策”を起草、それを参政後藤象二郎が土佐藩主山内容堂に上申、老中より政夷大将軍徳川慶喜に提出され二条城にて大政奉還の勅使がなされた。大政奉還後、開成館収支決算は多額の借入金、その後始末は貨殖局主任彌太郎にまかせられる。彌太郎はそれをチャンスとしてとらえ九十九商会を発足させ今の巨大企業三菱を創設していく。

先人の歴史が在り、今が在る。先人の歴史を知らずして未来は語れない。さて今の高知県150年前から優秀な若者は江戸（首都圏）へ出て行ってしまい、高知はまっこと人材不足。前回の選挙は合区で土佐は阿波に吸収合併されたようなもの。私は今一度輝かし栄光の1866年九反田開成館時代を検証することが、高知県産業振興のヒントになると考えますが、皆さんどう思います。

“話してみるかよ”

「一宮幼稚園版・坂本龍馬検定」

一宮幼稚園長　宮　英司

幼稚園内に坂本龍馬コーナーをつくっている。

龍馬の写真、人形、新政府綱領八策の額、全国の龍馬像MAP、龍馬の年表等々…。中学校に勤務していた時にもこれほどのスペースはつくれなかったので、本園の子どもたちは恐らく全国の幼稚園児の中でも突出した「龍馬情報享受幼稚園児」ということになる。

それに飽き足らず、「幼稚園版・坂本龍馬検定」を始めた。①龍馬の誕生日は？②龍馬は何人きょうだいの何番目だった？③お兄さんは何人いたの？④お姉さんは何人いましたか？⑤龍馬のすぐ上の姉さんの名前は？⑥龍馬の奥さんの名前は？⑦龍馬が仲間と一緒に行きたかった所は？⑧日本で初めての新婚旅行の行先は？⑨龍馬のお墓はどこにありますか？⑩龍馬が亡くなった日はいつでしたか？……である。

これが子どもたちに大ウケで、11月はまさに龍馬月間となる。そして年長には「坂本龍馬カード」、年中には「坂本龍馬がんばり賞」を贈呈して、次年度のパワーアップを目指すこととなる。

私は常々残念に思っている。高知の子どもたちは驚くほど龍馬のことを知らない。教科書でも扱いは簡単である。もっと、子どもたちが龍馬のことに触れる機会をつくってやりたい。それが高知で生きている値打ちだと思う。子どもたちが、龍馬のことを忘れたとしても、小学校の授業で再び龍馬に出逢った時にきっと幼稚園の龍馬コーナーを思い出してくれることだろう。また、こうした基礎知識は、子どもたちが成人したのちにきっと役に立つ。

将来、子どもたちが県外で生活を始めた時に「さすがは高知の方ですね。龍馬のことも詳しいですね。」と言ってもらいたい。そういう子どもたち（大人）を育てていきたいと願っている。

高知県立坂本龍馬記念館・現代龍馬学会
〒781-0262 高知市浦戸城山 830
TEL（088）841-0001　FAX（088）841-0015
mail:gendai-ryoma@kochi-bunkazaidan.or.jp